

佳作

私のことを救った祖母

茨城県 常総学院高等学校一年 小島 亜冴美

誰にでも、長い一生のうちには、自分のことを救ってくれる「救世主」が現れるのではないでしょうか。幸せなことに、私の周りには、「救世主」が大勢います。しかし、私の一番の「救世主」は、祖母です。

私には、兄と弟がいます。兄とはさほど歳が離れていませんが、弟とは五つ、歳が離れています。一番幼いこともあって、家族の中で一番可愛がられていました。私はいつのまにか、そんな弟に嫉妬していたのです。

私が小学五年生の頃です。まだ小学生にもなっていない弟が褒められるたび、心の中にあつた私の嫉妬心は次第に大きくなっていききました。私だって頑張っているのに、弟のことは、たとえ小さなことでも褒めるのに、私のことは、小さなことで怒るんだ、と。兄は既に中学生で、勉強に集中し始め、そのようなことを考えている様子はありませんでした。今となっては思い込みすぎだなと思います。当時の自分にとっては、とても真剣な悩みでした。

ある日のことです。夕食の時間になりました。私と兄は、夕食を食べ始めました。しかし、弟はご飯には手をつけず、ずっとテレビを見ています。そんな弟を見て、今まで心の奥にあつた気持ち爆発し、食べたくなければ食べなくていい、と怒鳴ってしまったのです。

しかし、その後も、その気持ちは抑えきれません。黙って下を向いている弟には目もくれず、ずっと心の中にあつたことを言ってしまう。今となっては覚えていませんが、ずいぶんとひどいことを言った気がします。自分でも最低なことを言っているのは分かっている、でも、やるせない気持ちは分かっている、そんな気持ちでした。怒る私に、祖父が弟をかばうような形で入ってきました。祖父の言っていることは正論でした。それは、当時の私にも、十分分かっていました。祖父は私を正しい道に導いてくれている、しかし、悪いことをしているという自覚がなかった私は、その言葉にショックを受けました。何より、弟のことをかばったことに衝撃を受けました。私は悔しくなり、その場から逃げ、部屋に閉じ込めました。正論を言われ、悔し涙が溢れてきました。祖父の言ったことは正しい、でも、私が欲した言葉はそうではない。弟のことだけではなくて、私のことも見てほしい。私は涙を流したまま、そんなことを思っていました。すると、突然、祖母が部屋に入ってきたのです。急な出来事だったので涙をぬぐいきれず、泣いてい

ることを祖母に気づかれてしまいました。祖母はしばらくそこに立っていました。その間が、私にとっては恐しいものでした。ひどいことを言い、一人で泣いている私を怒鳴るのではないか。呆れるのではないか。嫌うのではないか。いつのまにか涙は止まり、代わりに恐怖が私を支配しました。ゆっくりと私に近づいてくる祖母、私は覚悟して、目を閉じました。しかし、祖母がとった行動は、私の予想していたものとはまったく違うものでした。祖母が、私のことを抱きしめたのです。家族に抱きしめられたのは何年ぶりだったのでしょうか。懐かしい気持ちと共に、私のことを見てくれた、気にしてくれた、そんな気持ちで涙を誘いました。嬉し涙を流す私に、祖母はこう言いました。

「家族皆、私の宝物だよ。貴方のことを好きでいてくれる人は絶対いる。私も、貴方のことが大好きだよ。」
大好き。宝物。今ではもう、皆が決まり文句のように言う台詞、しかし、私はその言葉にどれほど救われたのでしょうか。私が欲していた言葉はこれだった。大丈夫、私は愛されている。それを知った瞬間、心の中にあつた嫉妬心が消え、心に灯がともりました。あの日、弟からこの感情を、祖父から正しい道を、そして祖母から宝物について教わっていなければ、私は、得体の知れない感情に吞まれていたことでしょう。家族にとっては何気ない日だったのかもしれませんが、私にとっても、私にとって、

あの日は、人生のターニングポイントだったので。
今日も私の家族は、食卓を囲み、他愛のない話をし、平和な日々を過ごしています。時には怒ったり、喧嘩をして、泣きたくなるようなときもあります。ですが、いつのまにか、そんなことも忘れ、皆で口を大きく開けて笑い合える時間がやってきます。毎日心から笑えるのは「救世主」のおかげです。優しい「救世主」が、私に幸せをくれました。私もいつか、祖母のような、人に幸せを与えることのできる「救世主」になれるでしょうか。いいえ、なってみせます。その気持ちで、優しさが、私にとつての祖母への恩返しなのですから。